



Since 1877

令和7年度
第1回
貴重資料展示

学習院大学図書館所蔵

貴重資料展

「伴大納言絵巻（絵詞）」

< 応天門炎上の場面 『伴大納言絵巻』上巻（当館資料【[巻]三】） >



< 子供喧嘩の場面（真相暴露の時） 『伴大納言絵巻』中巻（当館資料【[巻]一】） >



伴大納言絵巻（絵詞）とは

平安時代前期に起こった応天門の変を題材とする絵巻物。制作年代は12世紀後半、絵の筆者は常磐光長と伝えられ、詞書は藤原教長説が有力視されている。中世期に若狭国松永荘の新八幡宮に伝わり、江戸時代には若狭小浜藩主酒井家の所有となった。現在は出光美術館が所蔵し、国宝に指定されている。当館にある資料は、この原本から模写されたもの、あるいは模写をさらに複製したものと考えられる。

絵は洗練吟味された流暢な描線で描かれ、色彩も華麗で優美な色調が示されている。その画風は平安時代宮廷絵所の様式を示しており、『信貴山縁起絵巻』や『源氏物語絵巻』と並ぶ平安時代大和絵様式の本流を示す作品と評されている。

損傷の痕跡などから、元々は長大な一巻であったと考えられているが、現在は三巻からなり、上巻は応天門炎上と、清涼殿に参じ事件の真相糾明を唱える藤原良房、中巻は天に無実を訴える源信、真相暴露のきっかけとなった子供の喧嘩、下巻は放火現場の目撃者である舎人の召喚取調べ、流罪となった伴大納言の護送がそれぞれ描かれている。中、下巻には詞書も書かれており、その内容は13世紀に成立した『宇治拾遺物語』巻十に収録されている説話〈伴大納言応天門をやく事〉とほぼ同一となっている。なお上巻の詞書は、破損により失われたものと考えられている。

応天門の変（おうてんもんのへん）

平安時代前期、応天門の炎上をめぐって起きた政治的疑獄事件。貞観八年（866）閏三月十日の夜、朝堂院の正門、応天門が焼失し、はじめ左大臣源信に放火の嫌疑がかけられたが、その後備中権史生である大宅鷹取による告発があり、大納言伴善男とその子中庸に対する嫌疑が深まった。最終的に善男父子が自供し放火犯と断定され、父子・関係者ともども遠流・配流の刑となり、莫大な資財田宅も没収されて古来の名族伴（大伴）氏の勢力は失墜した。

正史では伴善男父子を真犯人としているが、犯人と断罪された伴善男は、弘仁朝以来、次第に政界に地歩を占めてきた文人派能吏を代表する人物であり、摂関政治の確立をめざして着々と布石を進めていた太政大臣藤原良房にとって邪魔な存在であった。事件の審理中に良房本人が摂政となり、その後姪の高子の入内、嗣子基経の中納言特進など、この時期の藤原氏一族の勢力増大が著しいことから、放火の真犯人が誰であるかにかかわらず、藤原良房が応天門の炎上を巧みに利用し、源信や伴善男など政敵を排斥したものとの見方が有力となっている。

当館資料の概要

資料の点数については原本同様三巻構成であるが、当館資料の形状は、卷子ではなく折本となっている点が異なっている。表紙の形状は布装で、各巻左上部に題簽が貼付されているが、実物の巻号順とは異なり「中巻⇒[巻]一」、「下巻⇒[巻]二」、「上巻⇒[巻]三」の対応関係になっている。表紙／本体接合部の下部を確認すると、原本

と一致する巻次が朱で記載されており、作成当時のものと推定されることから、題簽を貼付した者が、何らかの理由で貼付対象を間違えたものと推測される。

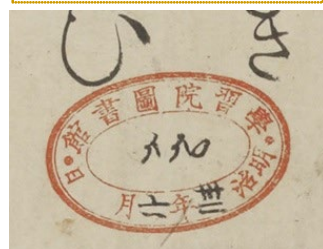
資料の作成者については、[巻]一の巻末部に「文化八辛未年五月廿六（26）日 養信写」と記載があり、当館原簿にも「狩野養信写本」との記載がある。このことから、江戸後期に古典作品の模写を数多く手がけた幕府御用絵師の狩野養信（おさのぶ）[1796-1846]であると推測されるが、養信が作成した伴大納言絵巻の模写は東京国立博物館にも残されており、その中巻（当館の[巻]一）に記載された日付と同一であることを考慮すると、当館の伴大納言絵巻は、東京国立博物館の資料をさらに模写したものである可能性も考えられる。ただし、同一資料の模写を養信が複数作成している事例があり、他の巻（二、三）には日付・署名記載が見つからない（東京国立博物館分は記載あり）ことなどから、最終判断には慎重な確認が必要である。

資料の受入時期については、[巻]一の冒頭下部蔵書印の日付欄に「明治卅二（32）年六月」とあり、この頃と推定されるが、当館原簿には「伴大納言繪巻 狩野養信写本 三[点]」の記載のみで、受入先や正確な受入日の情報は記載されていない。

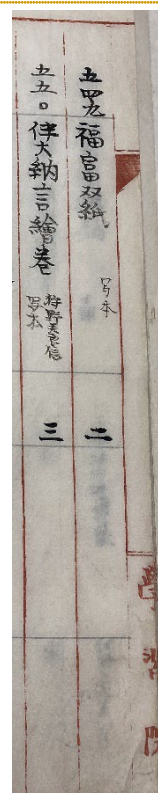
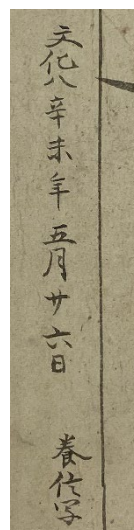
<当館所蔵資料の表紙> ※「一」とあるが実際は中巻

<蔵書印の日付[巻]一>
※明治卅二（32）年六月

<当時の原簿>



<模写記録
[巻]一>
※文化八辛未
(1811) 年
五月廿六
(26) 日
養信写



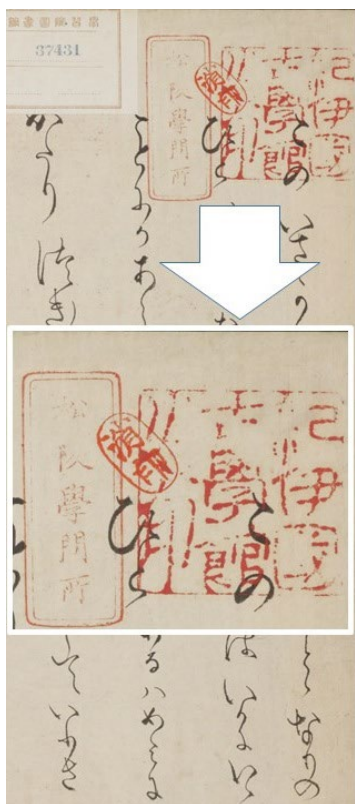
なお、各巻冒頭の右上部には紀州（和歌山）藩の藩校である「紀伊國古學館」および「松阪學問所」の蔵書印があり（「紀伊國古學館」印は裏面にも押印）、この資料が当初紀州（和歌山）藩の所有であったことが確認できる。印影の重なりや藩校設立の時系列から考えると、当初松阪學問所（1804 年開設）で所蔵していた資料が紀伊國學所（古學館 1856 年開設）に移管されたのではないかと推測される。

興味深いのは、[巻]三の表紙接合部下部にのみ記載された内容で、正しい巻表示（上）のほか、他巻にはない記載と押印がなされている。それぞれ判読すると、墨書は「落合幾治郎 明治十六年 五月廿二（22）日求之」、印影は「芳幾」（篆書体）と推測される。判読通りであれば、幕末から明治初期にかけて新聞錦絵等の挿絵画家として

活躍した浮世絵師落合芳幾（本名：落合幾次郎 [1833-1904]）である可能性が高く、一時期この資料を所有していたことになる。落合芳幾がこの資料を入手した経緯や目的、またそれがなぜ学習院の所蔵となったのかについては現状全く不明であり、事実の確認も含め、今後の調査が待たれるところである。

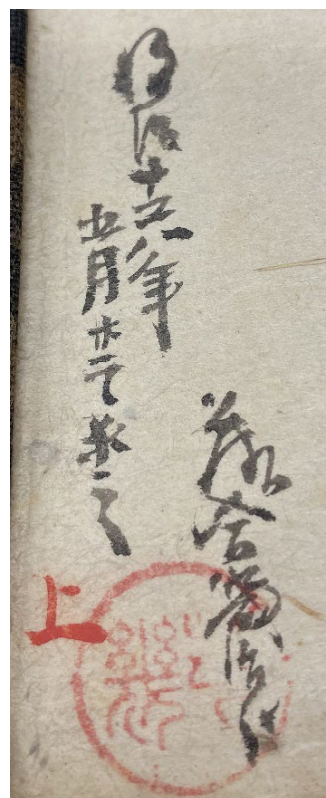
<[巻]二 冒頭部の旧蔵書印>

※紀伊國古學館之印
※松阪學問所



<[巻]三 表紙接合部>

署名（落合幾治郎）と日付（明治十六年 五月廿二（22）日求之）が記載



<参考文献>

日本大百科全書. JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>, (参照 2022-11-3)

世界大百科事典. JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>, (参照 2022-11-3)

国史大辞典. JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>, (参照 2022-11-3)

日本近代文学大事典. JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>, (参照 2022-11-9)

松原茂. 断面日本絵画史. 木耳社 (1988)

若杉準治. 絵巻=伴大納言絵と吉備入唐絵 (日本の美術 第 297 号). 至文堂 (1991)

学習院大学図書館所蔵 貴重資料展

「伴大納言絵巻（絵詞）」

発行日：令和 4 年 11 月 24 日

発行者：学習院大学図書館

学習院大学デジタルライブラリーでは、本展示資料等の貴重書をオンラインで閲覧できます。

■学習院大学デジタルライブラリー

<https://glim-op.glim.gakushuin.ac.jp/>

2027 年 学習院は創立 150 周年を迎えます

